

セントルイスでの留学生活

Division of Cardiovascular Surgery
Department of Surgery
Washington University in St. Louis

田中 佑貴
(北里大学心臓血管外科学)

私は2018年3月からアメリカ合衆国ミズーリ州セントルイスにあるワシントン大学に留学しております。シカゴの少し南に位置しており、都市としてはあまり大きくはありません。留学前にセントルイスについてネットで検索しましたが、かなり治安が悪いことが強調されておりました(全米で2番目に治安が悪いみたいです)。そのため期待半分、不安半分で渡米しましたが、実際に着いてみると治安の悪さを実感するような経験をするともなく、程よい大きさの都市でむしろ住みやすいというのがセントルイスに対する私の感想です。

ワシントン大学は臨床が特に強い大学として知られておりますが、研究にも力を入れています。ワシントン大学に限ったことではないと思いますがアメリカでは学生の時から研究に触れる機会が多く、医学部生が夏休みなどを利用して興味のある Division で臨床研究を行っています。学生だけでなくリサーチフェローも研究に対する意識が高く、日本との違いを実感させられます。現在、ワシントン大学には全体で20名ほどの日本人研究者が留学しております。私は Cardiovascular Surgery に所属しており、VAD 関連の研究を行っております。今行っている研究はポンプ内の血栓を可視化するバイオイメージングの研究です。このプロジェクトは私たちのラボ、循環器科、放射線科の共同研究で、われわれ心臓外科は主に手技的なところを担当しています。まだ研究は道半ばですが、残り1年で何とか形になるように努力したいと思います。また、動物実験がない日は臨床研究を行っており、時間が無駄にならないように工夫しています。

渡米から1年が経過し、研究も軌道に乗ってきましたが、この1年を振り返ると順風満帆ではありませんでした。やはり一番実感するのは言葉の壁で、昔から英語が苦手だった私にとっては重くのしかかっております。最初は英語に自信がないためネイティブとの交流に抵抗感しかありませんでした。話が伝わらなくて相手がイライラするのではないかと余計なことを考えていましたが、最近では語学習得のためにはまず抵抗感を克服することが重要だと考えるようになりました。積極的にネイティブと交流することが大切だと思います。研究はもちろんですが、言葉を含めその国の文化を学ぶことも同じくらい重要だと思います。せっかくの機会が無駄にならないように、できる限りこちらの文化に溶け込みたいと思います。

一つ心残りがあるとすれば、家族全員で渡米できなかったことです。理由はいろいろあったのですが、もう少し子供が小さければ、おそらく家族で行っていたことでしょう。留学はタイミングが重要といわれますが、まさにその通りだと思います。家族を日本に残して留学するかどうか相当悩みました。何を優先するかは人それぞれだと思いますが、私は留学しないと後悔が残ると思ったので単身で留学することに決めました。

リサーチでの留学においては、生活費等のお金の工面も苦勞することの一つではないかと思ひます。私の場合、留学の際の受入れ条件が資金を自分で確保することで、おまけに証明書も必要でした。上原記念生命科学財団の助成がなければおそらく留学できていなかったと思ひます。最後になります、サポートしていただいた上原記念生命科学財団の皆様にはこの場をお借りして感謝申し上げます。 (2019. 3. 25受領)



Barnes-Jewish Hospital

セントルイス・ワシントン大学留学記

Washington University School of Medicine

武藤 義治

(九州大学大学院医学研究院病態機能内科学)

アメリカのミズーリ州セントルイスは中西部の主要都市の一つで、田口選手が所属していた大リーグチームであるカーディナルスがあることで日本人ではご存知の方もおられると思

います。古き良き伝統を持つ小さな町の雰囲気から、都市ならではの整備されたインフラを兼ね備えた都市で、物価の安さも併せて、全米の中で最も住みやすい都市の一つに選ばれたこともあります。特にその郊外は美しい緑に囲まれており、お子様連れや家族同伴で留学される方にはお勧めです。

私の所属するワシントン大学医学部の Humphreys 研究室は教授とポスドク6-7人からなる中規模の研究室で、腎臓疾患の病態解明と治療法の開発にシングルセル解析の観点から主に研究を展開しています。近年、発展が目覚ましい単一細胞解析により、中枢神経や腎臓などの多くの細胞種からなる複雑な臓器システムの生理・病態解明が急激に進んでいるサイエンスの世界の変革を、米国で最先端の研究施設の一つで目の当たりにできて非常に刺激の多い研究生を送っています。日本ではウエットの研究ばかりで、ドライ解析はアメリカで始めたのですが、ドライ解析は学べば学ぶほど今後のサイエンスの潮流（ビッグデータ化の流れ）でそれが重要であることを実感します。

ボスの Ben Humphreys は非常に人柄が良くフレンドリーで誰と話すときも笑顔を忘れません。もちろんサイエンスのディスカッションは厳しいですが、分かりやすい英語で、かつ思慮深くキレがあって話していてとても楽しいし、彼の視点はとても勉強になります。

研究も、また研究を通して得られる人間関係もとても充実しています。ただ、当初キャリアの過程であまり留学を意識していなかったこともあり英語で苦労することが多いですが、それもまた留学ならではの経験というか、なかなか追い込まれないと英語を勉強する機会もないと思うのでいい機会と捉えて日々勉強しています。また、妻もこれを機に地元の ESL に通学しており、妻を通じた様々な国の人たちとの交流も、楽しく英語を学ぶ機会になっています。この体験記をご覧の方で留学を選択肢の一つとして考えておられる方は、なるべく英語の準備をしっかりされることをお勧めいたします。とはいえ、普段の研究や臨床の中で語学を勉強する時間を捻出するのはなかなか難しいと思います。留学してまだ一年ではありますが、実際、英語はコミュニケーションの意志さえあればどうにかなると感じていますし、もし海外留学に興味があれば、英語の壁を躊躇せずに飛び込むことをお勧めします。

まだ一年が経過したばかりで、これからいろいろとあるかもしれませんが、留学中に得られた経験は私にとっても（家族にとっても）他の何物にもかえられない貴重な財産となるとすでに確信しています。最後になりますが、私の留学を快諾してくださった九州大学大学院病態機能内科学の北園孝成教授、そして九州大学の腎臓研究室の主任で、現在の留学先をご紹介くださり強く後押ししていただいた中野敏昭先生、そして、今回の留学に際して多大なるご支援を賜りました上原記念生命科学財団の皆様にご心より御礼を申し上げます。

(2019. 5. 1受領)